

サンクト・ペテルブルグの 眠れる森の美女』

マリンスキー・バレエ唯一のイギリス人団員ザンダー・パリッシュが、『眠れる森の美女』に初主演。豊かな将来性を感じさせたその舞台について、マイク・ディクソンがお伝えします。

プティパ振付の『眠れる森の美女』は1890年にマリンスキー劇場で生まれ、現在は、原典版の特長を多く継承する壮麗なコンスタンチン・セルゲイエフ版が第二劇場の広い舞台上で上演されている。だがこの版には、プティパの意図を歪曲した稚拙なソヴィエト時代の趣向も散見され、たとえば、プロローグで贈り物をする妖精たちは、そもそも純粋、豊かさ、雄弁、威厳などを象徴していたのが、優しさ、寛容、勇気等に変えられている。名前自体はさほどでないにしても、振付に組み込まれた姫への贈り物の図像学は重要だ。歌うカナリアの精は現在ではフルートを吹いているように見えるが、元々は、雄弁を示すために両手を口の脇に当てひらひらと動かしていた。また手首のゆらぎは豊かさの象徴としてパンくずをまき散らす動きを示していたのが、今や奇妙で意味のない、湾曲させた腕の動きにさし替えられている…といったあら探しはさておき、リラの精を踊ったアナスタシア・コレゴワは高くみごとにコントロールされたエクステンションが効果的で、他の妖精役のダンサーたちの踊りも質の高い踊りだった。また子どもの使い方がいかにもプティパらしく、とくにガーランド・ダンスは、24人のみごとに訓練された少年少女たちが、32人の大人のダンサーたちとともに踊り、趣きあるスペクタクルだった。ウラジーミル・ポノマリョフの王が実際に行進を率い、自らの宮廷での出来事一つひとつに反応しているのも新鮮、王妃のエレーナ・バジェノワは女性的で優雅だ。先ごろの『アンナ・カレーニナ』でカレーニンをみごとに演じたイスロム・バウムラードフが知恵と悪意に満ちたカラボスで、身体をくねらせた歩みが、悪の妖精のねじれた性格を象徴していた。またエカテリーナ・オスモールキナのフロリナ王女は全身のコントロールが完璧で、個々のステップはじつに洗練されていて見事であり、アレクセイ・ティモフェーエフの青い鳥は鋭く繊細な足と、すぐれたエレベーションが印象的だった。

オーロラ姫のアリーナ・ソーモワは、この役に求められる資質をすべて備えている。美しく優雅で、ジャンプは強く、ラインは純粋でとても叙情的でもある。一方で、若い姫君を演じるというよりマリンスキーのバレリーナそのままに存在している場面が多く、その分、演劇的な説得力は弱まった。オーロラという役は、第一幕の初々しい少女か



マリンスキー・バレエ『眠れる森の美女』でのザンダー・パリッシュ Photo: Emma Kauldhar

ら、最後の幕でのもっと王女然とした威厳ある存在へと成長していかなくてはならない。この“成長”という課題をクリアすれば、ソーモワは世界最高のオーロラになるだろう。ローズ・アダージョには安定感と本物の優雅があったが、少々せわしく、もっぱら求婚者たちのサポートに頼っていたので、さほど興奮を誘われなかった。だがその後続くヴァリエーションは、ソーモワの最良の部分を見せるものであり、技術的にも完璧で眼福といえるべきばえ。最後のパ・ド・ドゥでも彼女は期待どおりで、平静を保ち、もっとも難しいステップもやすやすとこなしていた。

今回がデジレ王子の初役となるザンダー・パリッシュは、最初の狩猟の場面では内省的で控えめだったが、続く幻影の場から城へと進んでいくところでは躍動感と威厳をもって敵に勇敢に立ち向かい、剣を片手に大きな存在感を發揮していた。グラン・パ・ド・ドゥのヴァリエーションはこの夜のハイライトともいえるもので、ダブル・トゥール・アン・レールは完璧、ビルエットは形がよく、ジャンプは堂々として空を駆けるようだった。パリッシュは新しい役に挑むたびに成長しているようで、身体も力強くなり、ポール・ド・ブラは以前にもまして力感と表現力が豊かになった。今やノーブルな主役ダンサーの本質を完璧かつ堂々と体現し、このデジレ王子は、後々までも彼の十八番として語り継がれるのでははいか。ソーモワとのパートナーシップは視覚面でも感情面でもバランスがよく、サポートも行き届いていた。カーテンコールで大きなバラの花束を贈られたパリッシュは、即座にそれをソーモワに渡し、愛と感謝を示した。音楽のテンポはほぼ完璧で、ダンサーに配慮しつつ、いざという場面では緊迫感にあふれる。ガヴリエル・ハインの知的な指揮は、オーケストラの豊かな音色を個としても全体としても引き出した。いつの日か、ハインがコヴェント・ガーデンでもバレエを振ってくれるよう祈っている。(訳:長野由紀)